

鼠 塚

1347年シチリアから流行したペストは、罹患すると皮膚が黒くなることから「黒死病 (black death)」と呼ばれ、世界全体の3分の1に相当する4,000万人以上の死者が出たと言われる。当時は汚れた空気が原因とする説と、伝染性の病原物質に接触することが原因であるとする説の2つの学説で争われていたが、どちらも科学的に証明されず感染症対策に結びつくことが無かった¹⁾。

1894 (明治27) 年、香港でペストが流行した際、北里柴三郎 (1853~1931 年) らが調査のため政府から派遣された²⁾。日本の北里とフランスのアレクサンドル・イエルサン (Alexandre Yersin : 1863~1943 年) が別々に発見したが、第一発見者の栄誉は雑菌を分離して発表したイエルサンのものになった。

ペストは元々ネズミなどの齧歯類に流行する病気、特にクマネズミの間で流行する。菌を保有するネズミの血を吸ったノミが人を刺すことによってその刺し口から菌が侵入したり、感染者からの血痰などに含まれる菌を吸い込んだりすることで感染する。

1899 (明治32) 年のペスト流行に際し、ペストが神戸・大阪・岐阜を経てやがて東京へ侵入する事を危惧した松田東京市長 (当時) は、一つの奇策を同年12月27日の東京参事会に提案した。ペストの媒介者である鼠を駆除することによって、ペストの予防・撲滅をはかろうとしたのである。そこで、1万円を支出して20万匹の鼠を買い殺すことにした。近辺の交番に鼠を持参して現金引き換え切符を受け取り、それを区役所で換金するという買い上げの手段が採られた。

そこで、大人も子供も長い尻尾の端をつまんで鼠をぶら下げ、交番の前に立ち並んだ。その憤懣を『吾輩は猫である』の中で、“車屋の黒”がぶちまけている。

「いってえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。ひとのとった鼠をみんな取り上げやがって交番へ持って行きゃあがる。交番じゃだれが捕ったかわからねえからそのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんかおれのおかげでもう一円五十銭くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせた事もありゃしねえ。おい人間てものあ体のいい泥棒だぜ」³⁾。

こうして集められた鼠は桐ヶ谷その他の火葬場で焼き捨てられ、防疫処置として殺された鼠の慰霊碑“鼠



写真 1



写真 2

塚”が、1902 (明治35) 年、祥雲寺 (渋谷区広尾) 境内に建立された (写真1)。

この墓地は、関ヶ原の戦いで武功を挙げた黒田長政のほか、宝生流家元代々の墓や常磐津開祖の墓などがある。墓地に入ってすぐ右手に高さ3メートルほどの石碑がそそり立っている。碑の裏面には「数知れぬねずみもさぞやうかぶらん、この石塚の重きめぐみに」の歌が刻まれている。

表書きの下に描かれた3匹の線画は愛嬌のある鼠である (写真2)。この鼠たちのおかげか、1926 (大正15) 年以降、日本でペストは発生していない。

■ 参考資料 ■

- 1) 宮崎揚弘, ペストの歴史, 山川出版社 (2015)
- 2) 北里研究所, 北里研究所七十五周年誌 (1992)
- 3) 夏目漱石, 吾輩は猫である, 新潮文庫 (2003)

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕